

第1部

コミッサオン・チ・フレンチ 「デッサン、最初の描線」

振付 ヘナート・ヴィエイラ

ラフスケッチから完成画まで、少年ジョアン・カンヂドと彼の仔馬の姿を再現する。カンヂド・ポルチナリ本人による署名まで。

トリペー(三脚の小出車・コミッサオン・チ・フレンチの背景として)

「キャンバスを突き破り、現実へ」

ポルチナリのアトリエを表現する。キャンバスから我々のパレードという現実には飛び出してくる想像に焦点をあてる。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第1ペア)

ホブソンとアナ・パウラ

「導きの星(北極星)」

ペアでモシダーチのシンボルである、我々を導く星、カンヂド・ポルチナリの世界への我々の旅路を照らす星を表現する。

トリペー(三脚の小出車)(アプリ・アールス1号)「天の使い」

トリペー(三脚の小山車)(アプリ・アールス2号)「天の使い」

二つの小出車で、天使がラツパを携えて天空からモシダーチのパレードへとやってきたことを告げ、我々の大地に星をちりばめる姿を表現する。

DESTACQUE(右) エヴァンドロ・メンデス

DESTACQUE(左) アイウトン・ロウザーダ

第1アール 「星座」

星々が集まって(振付によって、ある時は)一つの星となる様子表現する。

第1山車(アプリ・アールス)「君がため、ポルチナリ——その世界」

太鼓が鳴り響き、天空に住む巨匠ポルチナリに対して、パドレ・ミゲウの導きの星を、彼の芸術作品として加えてくれるよう、呼びかける。

DESTACQUE(中央・下) パトリシア・ヴィアーナ 「星の軌跡の上で」

DESTACQUE(中央・上) ジョアン・バチスタ 「星座」

その他搭乗員 「星々」

第2部

第2アーラ「少年と凧」

ポルチナリによる連作には、新聞紙で作った凧をかぶったり、色鮮やかな凧を(彼自身の幼少期に見たような)空にあげたりしている、ブロードウスキーの少年たちの姿が描かれている。

第3アーラ「ブロードウスキーのサーカス」

ポルチナリには自身の幼少期の思い出をキャンバスに再現した作品が多い。その中に、彼の地元でサーカスがやってきた様子を描いたものがある。

第4アーラ「トウモロコシ畑」

絵画「オ・ミリャラウ(トウモロコシ畑)」のように、田舎の風景は何度もカンヂド・ポルチナリによって描かれた。

トリペー(三脚の小出車)「かかし」

かかしは、ポルチナリの絵画によく登場し、自身のルーツである田舎を表現するパーツとして用いられている。

DESTAQUE SÍZIE・ブラジル

第5アーラ「かかし」

ポルチナリは、かれの作品に登場するかかしについて、自画像だと語ったことがある。

第6アーラ「サトウキビ」

我が国の地方で見られ、またポルチナリの作品によく登場するサトウキビ畑と栽培農家の様子を表現する。

第7アーラ「コーヒー農園」

生地であるコーヒー農場を題材として、カンヂド・ポルチナリの有名な連作が生まれた。

第2山車「コーヒー農園と夢の間に」

カンヂド・ポルチナリの死去にあたって、カルロス・ドルモン・ヂ・アンドラーヂが捧げた詩である「エントレ・オ・カフェザウ・イ・オ・ソーニョ(コーヒー農園と夢の間に)」を表現する。

DESTAQUE(中央・上) ハイ・フェエイラ「コーヒー男爵」

DESTAQUE(中央・下) ヘジーナ・マリンス「コーヒー男爵夫人」

副DESTAQUE「コーヒーの枝」

搭乗員「コーヒー収穫作業員」

第3部

第8アーラ「大地の子ら」

カンチド・ポルチナリ作の壁画「オ・デスコブリメント(発見)」の情景。

第9アーラ「ポルトガルの航海者」

「発見」のテーマに因んで、海を越えて新大陸にやってきた航海者の到着を表現する。

第10アーラ「バンデイランチス(奥地開拓者)」

旗を題材とした壁画。重ね描きによって、バンデイランチ(奥地開拓者)の装束を立体的に見せる効果が用いられている。

ハイーニャ・ヂ・バテリア アントニア・フォンテネリ「色彩の女王」

第11アーラ(バテリア)「絵筆」

バテリアの衣装は、画家の第一の道具である絵筆を人間の姿に表現して、それを称える詩的な口上とするものである。

DESTACADA DA ARRAZADA PASTAS

ジョルジ・ロウザーダ、ジェフィーニョ、デヂ(ハイーニャ・ダ・エストレリーニャ・ダ・モシダーヂ)

「色使いの名人」

色使いの名人が、アーラ・ヂ・パシスタスの統制者として、水彩画を操る。

第12アーラ(パシスタス)「水彩画」

パシスタのたち衣装は、白いキャンバス上に絵具をのせていく絵筆運びの構想を表現するものである。

第13アーラ「黄金の時代」

ブラジル史から、もうひとつの歴史局面である「黄金の時代」を取り上げる。

第14アーラ「インコンフィデンシア(ミナスの陰謀)」

カンチド・ポルチナリ作、我が国の銀行の本店のロビーに収められた、同名の壁画の一部に描かれた、チラデンチスの絞首刑の情景。

DESTAQUI・ヂ・シャオン アナ・パウラ・エヴァンジェリスタ 「新世界の魅力」

美しく官能的なインディオ女性を表現する。

第3山車 「デスコブリメント(発見)」

我々がブラジルの歴史の様々な局面を描いた、ポルチナリ作の多くの壁画のうちの一つを表現する。

DESTAQUI(中央・上) ホドリーゴ・レオカーヂオ 「新世界の先住民」

DESTAQUI(中央・下) エヴァンドロ・レッサ 「海を越えてきた航海者」

搭乗員 「先住民」

第4部

第15アーラ 「聖書の情景——アブラハムの犠牲」

旧約聖書の記述する情景を、パブロ・ピカソの手法に沿って描いたものとして、有名な壁画。

第16アーラ 「聖書の情景——子供たちの誘拐」

サンパウロのラジオ局、ハジオ・トゥピーに収められた壁画に描かれた情景。聖書の記述をモダニズムの手法で描いたもの。

第17アーラ 「天使」

ミナスジェライス州ベリ・オリゾンチ市のパンプーニャ湖の湖畔のサンフランシスコ・ヂ・アシス(アッシジの聖フランチェスコ)教会に収められた、ポルチナリ作の聖なる作品。

第18アーラ 「サンフランシスコ・ヂ・アシス(アッシジの聖フランチェスコ)」

動物たちの守護者であるアッシジの聖フランチェスコが、カンヂド・ポルチナリ特有のブラジル風タッチの自由な表現スタイルで登場する。

第19アーラ 「タイル画： 平和の鳩」

同じくパンプーニャにある、ポルチナリ作のタイル画。青い鳩がタイルで描かれた空に点在する。焼き物芸術家の象徴でもある彼に光をあてる。

第20アーラ 「タイル画： タツノオトシゴ」

リオデジャネイロのグスターヴォ・カパネーマ宮殿に収められたタイル画「オ・イポカンポ(タツノオトシゴ)」および壁に連続して埋め込まれた貝殻は、海底の様子を題材とした、カンヂド・ポルチナリの重要なタイル画作品のひとつである。

DESTACADA DE CHÃO FÁBIA ANA ANDRADA 「天使的な視点」

ポルチナリがタイル画作品に表現した天使的な優しい視点。

第4山車 「タイル画で表された空と海」

ミナスジェライス州のバンブーリャ湖畔のサンフランシスコ・ヂ・アシス教会およびリオデジャネイロのグスターヴォ・カパネーマ宮殿に収められたポルチナリのタイル画作品を表現する。

DESTACADA (CENTRO-CIMA) THIAGO AVANCI 「大天使」

DESTACADA (CENTRO-Baixo) CAUBELO CRIVELLE 「ツツノオトシゴ」

DESAJUNTADO 「タイル画」

第5部

第21アール 「フレイヴォ」

ポルチナリ作の「オ・フレイヴォ」を、ここでは田舎風のスタイルで、また、セルタオンに焼き付ける強い太陽のように熱い色使いで表現する。

第22アール 「ウルブ(黒いハゲワシ)」

ポルチナリの連作「オス・ヘチランチス(開拓地を放棄した引揚者たち)」に描かれた乾ききった大地を照らす空を飛ぶウルブの姿を表現する。

第23アール 「山賊」

これもまたセルタオンを象徴する存在である山賊も、ポルチナリによって何度も描かれた。

第24アール 「引揚者たち」

名作「オス・ヘチランチス(開拓地を放棄した引揚者たち)」に描かれた悲哀をことごとく表現する。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第2ペア)

フェリシアーノとナターリア

「セルタオンを焼く太陽」

乾燥したセルタオンに容赦なく照りつける太陽を表現する。

第25アール 「カルカラー(カンムリカラカラ)」

セルタオンの象徴的な生物のひとつである猛禽、カルカラー。セルタオンの乾燥がもたらす悲劇の現場を徘徊し、死を待っている。

第5山車 「セルタオンからの脱出」

乾燥したセルタオンの地から逃れる悲劇という題材は、ポルチナリの「オス・ヘチランチス(開拓地を放棄した引揚者たち)」や「ア・モルチ・ヂ・ウマ・クリアンサ(ある子供の死)」に描かれている。

デスタッキ(中央・上) パウロ・ホベルチ 「ウルブの王」

デスタッキ(中央・中) ヴァエウデッキ・エスカレイラ 「灼熱の太陽」

デスタッキ(中央・下) ムリエール・マサン 「乾燥地」

副デスタッキ 「カルカラーの群れ」

搭乗員 A 「ウルブの群れ」

搭乗員 B 「死」

第 6 部

第 26 アーラ 「村人たち」

ミゲル・セルバンテスの名作「ラマンチャの男」をカルロス・ドルモン・ヂ・アンドラーデがポルトガル語の詩で表現したものをポルチナリが絵画で表現したもの。

第 27 アーラ 「従者たち」

同じく中世を題材とし、チョークを使用する画法で、従者の姿を表現する。

第 28 アーラ 「ドウルシネーア」

ドン・キホーテが妄想した理想の貴婦人が小説から抜け出した様子を、色鉛筆で塗られた紙の衣装を着た姿で表現する。

第 29 アーラ 「サンチョ・パンサ」

英雄ドン・キホーテの忠実なる従者サンチョ・パンサが、この衣装で再現される。紙製のロバも装飾として付随する。

第 30 アーラ 「ドン・キホーテ」

物語の主人公ドン・キホーテが、輝く鎧に身を包み、槍を突き上げる姿を表現する。ただし、ここでは彼の槍は色鉛筆に置き換えられている。

デスタッキ・ヂ・シャオン アンジェラ・ビスマルキ 「中世のキメラ」

中世の女性を、官能性と合わせて表現する。

第 6 山車 「ドン・キホーテ——色鉛筆で詩を刻み」

挿絵画家としてのポルチナリの才能の一面として、数ある中からミゲル・セルバンテスの「ラマンチャの男」のカルロス・ドルモン・ヂ・アンドラーデ版のものに使われたものを紹介する。

デスタッキ(中央・上) マウリシオ・ピーナ 「ドン・キホーテ」

デスタッキ(中央・下) レアンドロ・アスーン 「サンチョ・パンサ」

副デスタッキ 「従者たち」

搭乗員 「村人たち」

第7部

第31 アーラ(作曲部) 「リオデジャネイロのマランドロ」

ポルチナリのファヴェーラを題材とした連作の中で、リオデジャネイロのモーホのマランドロの姿が描かれている。

第32 アーラ 「サンバの旗」

エスコーラ・ヂ・サンバの生成期を題材にしたポルチナリの「カルナヴァウ」には、メストリ・サーラとポルタ・バンデイラのペアの姿が描かれている。

第33 アーラ 「モーホの詩人たち」

リオデジャネイロのガフィエイラのバンドの姿を描いた、カンヂド・ポルチナリ作の「オス・ムジコス (ミュージシャンたち)」を表現する。

デスタッキ・ダ・アーラ サレッチ・ヴァンタニーア 「マリアが通る」

モーホの伝統的なキャラクター。その姿も、ファヴェーラを題材にしたポルチナリの絵画に描かれている。

第34 アーラ 「マリア・ラッタ・ダグア」

リオデジャネイロのモーホの住人の象徴的なキャラクター(訳注——生活用水を頭の上のブリキ缶に入れて水道が通っていない丘の上の自宅に運ぶ女性の姿)を、数々のバラックが付いた、カーニバル風の生き生きとした色彩の衣装で表現する。

第35 アーラ 「サンバがモーホを下りる」

マランドロたちとカプロッシャたちがモーホを下りてアスファルトの道へ出て、サンバ・ノ・ペを披露する。

第36 アーラ 「カーニバル」

ポルチナリ作の「オ・モーホ」にはたくさんのパンデイロが描かれており、カーニバルで演奏されるべく、サンバが坂を下りてくるという構図が盛り込まれている。

第 37 アーラ(ヴェーリャ・グワルダ)「サンバのルーツ」

モシダーチのヴェーリャ・グワルダは、真のサンバのルーツを称えるという点で、エンヘッドに合致する。

デスタッキ・ヂ・シャオン ジェーリとリリアン「サンビスタとカブロッシャ」

サンビスタたちとカブロッシャたちがモーホを下りてアスファルトの道へ出て、サンバ・ノ・ペを披露する。

第 7 山車「モーホ：実生活の姿」

カンチド・ポルチナリは、常に美しさとあわせて、中心市街とファヴェーラとの対比を盛り込んで我らがリオデジャネイロを描き、ショーロ、サンバ、モーホ、そして、そこに関わる人々、マランドロ、ムラータ、多くのマリア・ダ・ラッタ・ダグア的な女性たち、バイアーナたちを不朽の存在へと昇華させた。

デスタッキ(中央・上) ホドリーゴ・ヘイナウチ「あなたこそが、モーホを題材に真の人生を作り出した」

デスタッキ(中央・下) メイミ・ドス・ブリーリョス「カブロッシャ」

特別デスタッキ エルザ・ソアレス「モーホの声」

特別デスタッキ エライニとアレシヤンドレ「サンバの旗」

搭乗員 A(ヴェーリャ・グワルダ)「モーホの伝統」

搭乗員 B「ムラータたちとマランドロたち」

第 8 部

第 38 アーラ「悪」

ポルチナリ作の壁画「戦争と平和」の「戦争」の部分モチーフにして、戦争が引き起こす悲しみを表現する。

第 39 アーラ「黙示録の騎士と審判の天使たち」

黒い馬が 4 つのパートに分裂し、紛争がもたらす惨事を表現する。また、我々が悪に対する勝利を期待する正義の騎士も登場する。

第 40 アーラ「善」

ポルチナリ作の壁画「戦争と平和」の「平和」の部分には、平和な時代に存在する、健康、豊穡、幸福が描かれている。ブランコをこぐ子供の姿が、世界中の明るい未来への希望を表している。

デスタッキ・ダ・アーラ・ダス・バイアーナス チア・ニウダ「平和の使者」

平和を通じてのみ人々へ及ぼすことができる「アシェー」の力を表現する。

第 41 アーラ(バイアーナス) 「平和」

「たとえ戦争のただなかに生きていたとしても、人は平和を夢見るものだ」というポルチナリの言葉をモチーフとして、モシダーヂのバイアーナスは平和の鳩を表現する。

第 8 山車 「たとえ戦争のただなかに生きていたとしても、人は平和を夢見るものだ」

カンヂド・ポルチナリは「たとえ戦争のただなかに生きていたとしても、人は平和を夢見るものだ」と語った。ポルチナリ作の壁画「戦争と平和」は国連本部の出入口に収められている。

デスタッキ(中央・上) マルコス・レロイ 「戦争と平和」

デスタッキ(中央・下) プリシラ・マシャード 「平和の夢」

搭乗員 A 「平和」

搭乗員 B 「戦争」